

那須野が原土地改良区と唐辛子の流通の見学

那須野が原土地改良区は栃木県北部に位置し、那珂川と箒川に挟まれた約 4 万 ha の広大な複合扇状地の農業用水の管理を行なっている。用水の管理はコンピュータによって 24 時間モニタリングされていた。ただ、用水の管理は操作盤によって手動で行われていた。土日にも常に操作盤を管理する人が常駐している。私は自動で管理を行なっていると思っていたので、意外であった。推測ではあるが、自動化を簡単には行えない理由としては①一度組んだシステムに手を加えるのは労力がかかる。②水利権問題は単なる技術的な問題では片付かない。という点があるのではないかと思う。農業用水の申請は申請後 2, 3 年もかかり膨大な資料が必要であるという。水利権問題は雨国であり、先進国である現在の日本においても水利権は非常に重要な問題であることを改めて認識した。

唐辛子の流通で初めに見学をしたのは唐辛子加工工場だ。工場のある大田原は昔は広大な唐辛子畑があり、海外にも輸出するほどであったという。しかし、現在は唐辛子畑も激減し、海外から原料を輸入し唐辛子の加工を主に行なっているという。やはり食品工場であるので安全、衛生管理が念入りに行われそこに情報技術が利用されていた。殺菌処理を行う際にパッキングされた商品を湯煎する際に、データロガーを入れて温度管理を行なっている。すべて機械によって自動化されていても必ずしも正しく動いているとは限らない。もし、機械が壊れていて衛生問題が生じた場合にはその会社の存続に関わる。やはり衛生面はきちんと管理されている。また、金属片のチェックは X 線検査で行なっていたが、木片のチェックは目視によって行われていた。私たちの食卓に届けられるまでには、ハイテクとローテクを合わせて念入りに安全管理がなされていることが理解できた。

工場の見学のあとは生産者の畑の見学に行った。見学した農家にはフィールドルータといい農地の環境を 24 時間準リアルタイムでモニタリングするコンピュータを利用していた。インターネットを通して農地の環境をモニタリングすることで農地の「見える化」を実現していた。とても先進的な機器ではあるが、バッテリーの問題などまだ課題も多いとのことだ。

農業において情報がどのように利用されているのかを1日かけて見学した。自動化されずに手間をかけている部分が多く他の産業に比べて情報化が進んでいない印象を受けた。情報化の余地がある所、人により手動で行う所をきちんと切り分けて効率をよくすることが農学における情報のあり方だと思う。